

謹呈

イギリス詩  
を学ぶ人のために  
東中稜代/小泉博一[編]

## 目 次

はじめに	……	小泉博一	1
序章 英詩の魅力	……	安田章一郎	5
第1章 韻律法について	……	桂山康司	10
第2章 詩型について			
第1節 ソネットについて	……	岡田岑雄	21
第2節 オードについて	……	村井美代子	29
第3節 バラッドについて	……	山中光義	34
第3章 チョーサー	……	斎藤 勇	39
第4章 スペンサー	……	福田昇八	48
第5章 シェイクスピア	……	佐野俊彦	56
第6章 ジョン・ダン	……	久野幸子	64
第7章 ミルトン	……	桂山康司	77
第8章 ジョン・ドライデン	……	高谷 修	85
第9章 アレグザンダー・ポープ	……	福本宰之	93
第10章 ウィリアム・ブレイク	……	柏木俊和	101
第11章 ウィリアム・ワーズワス	……	吉田正憲	109
第12章 S. T. コールリッジ	……	杉野 徹	117
第13章 バイロン	……	東中稜代	125
第14章 P. B. シェリー	……	原田 博	133
第15章 ジョン・キーツ	……	笠原順路	141

## 目 次

第16章 テニスン	……	西前美巳	149
第17章 ロバート・ブラウニング	……	桂 文子	156
第18章 エドワード・リア	……	Reggie Watters	164
第19章 トマス・ハーディ	……	内田能嗣	172
第20章 クリステイナ・ロセッティ	……	飯沼万里子	180
第21章 G. M. ホプキンス	……	山田泰広	188
第22章 W. B. イェイツ	……	宮内 弘	196
第23章 エドワード・トマス	……	飯田 操	204
第24章 A. E. ハウスマン	……	東中稜代	212
第25章 T. S. エリオット	……	安田章一郎	220
第26章 W. H. オーデン	……	風呂本武敏	229
第27章 ディラン・トマス	……	川野美智子	238
第28章 ジョン・ベッチェマン	……	小泉博一	245
第29章 フィリップ・ラーキン	……	櫻井正一郎	253
第30章 テッド・ヒューズ	……	小泉博一	263
第31章 シルビア・プラス	……	加茂映子	271
第32章 シェイマス・ヒーニー	……	薬師川虹一	279
あとがき	……	東中稜代	289
参考文献			291
索引			321
Acknowledgements			333

オジマンディアス

古の国からやってきた旅人に出会った。  
 彼は言った、「大きな胴体のない石の脚が  
 砂漠に建っている……。近くには、砂に、  
 半ば埋もれて壊れた顔がある。その洪面、  
 その引きつった唇、冷酷な命令を下すその嘲笑は、  
 彫師がかの性根をよく見抜いていたことを語っている。  
 命ないものに彫りつけられても、それを彫った手よりも、  
 またそれを養った胸よりも長く、生き延びて来たのだから。  
 さてその脚の台座には、次の言葉が見える。  
 我が名はオジマンディアス、王の王なり、  
 我の造りしものをとくと見て、汝ら諸侯、絶望せよ！  
 その傍らにはほかに何も残っていない。あの巨大な  
 骸の辺り一面には、茫々として剥き出しで  
 ただ真っ平らな砂漠が遙かに広がっているばかり」。

〔原田 博〕

第15章 ジョン・キーツ

(John Keats 1795-1821)

後期ロマン派の詩人ジョン・キーツは、1795年にロンドンの貸馬車屋の長男として生まれる。若くして父と死別、再婚した母とは事実上、生き別れとなり、15歳で医者<sup>の</sup>の徒弟となり、その後ガイ病院 (Guy's Hospital) の見習い実習生になる。10代半ば頃から、もと通っていた小学校の校長の息子の感化をうけてスペンサーを読み始め、急進的文藝誌『イグザミナー』(The Examiner) の主筆リー・ハント (Leigh Hunt) の知己を得て、それらの影響のもとに詩作を始める。「初めてチャップマン訳ホメーロスの世界をのぞき見て」(“On First Looking into Chapman's Homer”) は20歳の時の作で、ポウプ訳のホメーロスが一般的だった当時、ルネサンス期の劇作家・詩人ジョージ・チャップマン (George Chapman) の文体に接した感動をうたった傑作である。

これらの初期の詩を集めた処女詩集が1817年に出版されるが、その頃までには、医学の道を捨て、詩作に没頭するようになる。偉大な詩人たらしめたキーツは大作を書くことに取りつかれ、1817年春から初冬にかけて、ギリシアの牧羊者エンディミオンの理想追求の長篇物語詩『エンディミオン』(Endymion) を執筆する。その間にも彼はシェイクスピアを読み、翌1818年1月にはソネット「リア王再読」(“On Sitting Down to Read King Lear Once Again”) を書き、初期の詩で追求した感覚美に満ちたスペンサー的ロマンスの世界との決別を表明する。この1818年には、キーツにとって人生への洞察を深める契機となるさまざまな出来事が起

こる。『エンディミオン』の出版とそれに対する書評誌上での酷評、弟ジョージ夫妻のアメリカ移住、友人ブラウンとのスコットランド徒歩旅行、キーツが幼少時より親代わりになって面倒を見てきた一番下の弟トムの看病と病死、そしてファニー・ブローン (Fanny Brawne) との恋愛の進展、などである。

翌1819年は、詩人キーツの最も充実した年で、この年に書かれた主要な作品は、物語詩では、「聖アグネス祭前夜」(“The Eve of St. Agnes”), 「イザベラ」(“Isabella”), 「レイミア」(“Lamia”), パラッド風物語短詩「つれなき美女」(“La Belle Dame sans Merci”), ギリシア神話に取材した叙事的な神話「ハイピリアンの没落」(“The Fall of Hyperion”) (未完)、キーツの作品のなかでは最も有名なオード群「サイキへのオード」(“Ode to Psyche”), 「ナイティンゲールに寄せるオード」(“Ode to a Nightingale”), 「ギリシアの古瓶についてのオード」(“Ode on a Grecian Urn”), 「憂鬱についてのオード」(“Ode on Melancholy”), 「秋へ」(“To Autumn”) などがある。しかし、同年秋からは胸の病が悪化の一途をたどり、第二詩集『レイミア、イザベラ、聖アグネス祭前夜ほか』(Lamia, Isabella, The Eve of St. Agnes, and Other Poems) が出版された1820年夏には医者から転地療養を命ぜられていた。翌1821年2月、友人の画家セヴァン (Joseph Severn) に看取られてローマで死去。同地のプロテスタント墓地に埋葬された。

「聖アグネス祭前夜」(“The Eve of St. Agnes”)

これは、中世ロマンス風にしたあげられた物語詩で、執筆は1819年1月から2月。1月20日聖アグネス祭の前夜、乙女が正しく祈りを捧げて床につくなら、未来の夫がその夢に現われる、という伝説をふまえた作品である。詩形は、キーツが若い頃に貪るように読んだスペンサーの『妖精の女王』(The Faerie Queene) の

なかで使用されている「スペンサー連」という韻律。物語の主人公は、シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』に似て、互いに仇敵の家に生まれた相思相愛の男女、マデライン姫 (Madeline) と若者ポーフェロー (Porphyro) である。ポーフェローは身の危険をも顧みずマデライン姫の住む館に来て、老女アンジェラ (Angela) の助けで姫の隣室までたどり着く。月夜、極彩色のステンドグラスの色が、ひざまずいて祈りを捧げるマデラインのうえに落ちる。隣室からこの様を見ていたポーフェローは気が遠くなる。が、やがて――

26

Anon his heart revives: her vespers done,  
Of all its wreathed pearls her hair she frees;  
Unclasps her warmed jewels one by one;  
Loosens her fragrant boddy; by degrees  
Her rich attire creeps rustling to her knees: 230  
Half-hidden, like a mermaid in sea-weed,  
Pensive awhile she dreams awake, and sees,  
In fancy, fair St. Agnes in her bed,  
But dares not look behind, or all the charm is fled.

27

Soon, trembling in her soft and chilly nest, 235  
In sort of wakeful swoon, perplex'd she lay,  
Until the poppied warmth of sleep oppress'd  
Her soothed limbs, and soul fatigued away;  
Flown, like a thought, until the morrow-day;  
Blissfully haven'd both from joy and pain; 240  
Clasp'd like a missal where swart Paynims pray;  
Blinded alike from sunshine and from rain,  
As though a rose should shut, and be a bud again.

Stol'n to this paradise, and so entranced,  
 Porphyro gazed upon her empty dress, 245  
 And listen'd to her breathing, if it chanced  
 To wake into a slumberous tenderness;  
 Which when he heard, that minute did he bless,  
 And breath'd himself: then from the closet crept,  
 Noiseless as fear in a wide wilderness, 250  
 And over the hush'd carpet, silent, stopt,  
 And 'tween the curtains peep'd, where, lo! — how fast she  
 slept.

〈語注〉(行数と連数は原詩の通しの数)

- 227 *she* を主語にとる動詞は *frees* (L 227), *Unclasps* (L 228), *Loosens* (L 229).  
 行頭の *Of* は *frees* からつづく。  
 228 *warmed jewels*: 宝石をはずして初めて体温が伝わっていたことがわかる。極めて官能的。  
 230 *creeps rustling*: 衣擦れの音を表わして見事。  
 231 裸身に海草だけをまとっているから *Half-hidden* である。  
 232-3 *dreams awake, and sees, / In fancy*: 目は開いていても、現実にあるものが見えていない。  
 235 *nest*: ベッドのこと。  
 237-8 眠りにおちいる寸前、手足が温かく重くなり、意識が遠くなる様子が見事に表現されている。  
 239-42 *Flown, haven'd, Clasp'd, Blinded* はいずれも *soul* (L 238) を修飾している。ここでの比喩は、マデラインの夢の世界がいかに現実から隔絶された世界であるかを表わしている。  
 241 *like a missal where swart Pagnims pray*: 「浅黒いイスラム教徒が祈りを捧げる国では、[キリスト教の] 祈禱書が固く閉じられたままになっている、ちょうどそのように」  
 243 今宵ばかりは、開きかけた薔薇の花マデラインも、花を閉じて蕾にしていなければ、せっかくの夢が逃げていってしまうのだ。  
 28連 この連全体を支配している静寂——すこしでも物音をたてればすぐにでも破れてしまいそうな静寂——を味わいたい。  
 247 *a slumberous tenderness*: 安らかな寝息。  
 249 *breath'd himself*: ほとと吐息をついた。  
 250 *as fear in a wide wilderness*: 広い荒野で、びくびくと恐怖を感じている

人のように、の意だが、*fear* をこのように擬人化することによって、恐怖心だけがむき出しにされて荒野のなかに置かれているような感じになる。キーツの時代は、抽象概念を人間のように扱う擬人化の手法が古風に感じられるようになっていた。その時代にあつて、これは、実に斬新な表現。

252 *lo! — how fast she slept*: この時ポーフェローは初めてマデラインの寝姿を見る。それまでは、脱いだ服だけが見え、寝息が聞こえるだけだった。

この後ポーフェローは姫の床の脇にテーブルをしつらえ山海の珍味を並べる。(ロマンスでは、このように通常の物理法則や因果関係に縛られない語りがしばしばある。ただし、ここでの食の宴は、この後に続く二人の「甘い融合」を寓意的に表わしてはいる。) ポーフェローがマデラインに目を開けとささやいても、姫は「織られた糸のように空想にからめられて眠り続ける」だけである。ポーフェローはリュートをとり上げ、南仏プロヴァンス地方の古曲を奏でる。姫は、目を覚ますが依然として夢のなかの夫を見続けている。やがて夢のなかの夫と現実のポーフェローの落差に気がつき、「何てあなたは変わってしまったの。何て青白く、冷たい、悲しげな顔をしているの。昔のあの声で話して、ポーフェロー」と言う。すると、「女の夢のなかに男は溶けこんだ、ちょうどバラがその香をスマイレと混ぜあわせるように——甘い融合」こうして二人が甘い融合を逃げていながらも、外はみぞれ混じりの嵐になっているのだった。ここを境にあたりは暗く冷たい世界になってゆく。ポーフェローはマデラインを勇気づけ、嵐のなか館を脱してゆく、というところで物語が終わる。

一見、豪華絢爛たる中世風ロマンスの雰囲気のある作品だが、愛による女性の精神的成長を象徴的手法で描こうとしている点で、ロマン派の物語詩となっていると言えよう。

## 「秋へ」(“To Autumn”)

執筆は1819年9月。同年春から秋に執筆されたオード群のなかで最後に書かれたもので、キーツの最も円熟した詩才を表わしている作品。実り豊かな秋の自然を、朝から夕方へとたどりつつ、そのなかに死への予感を感じ取った作品。

## 1

Season of mists and mellow fruitfulness,  
 Close bosom-friend of the maturing sun;  
 Conspiring with him how to load and bless  
 With fruit the vines that round the thatch-eves run;  
 To bend with apples the moss'd cottage-trees, 5  
 And fill all fruit with ripeness to the core;  
 To swell the gourd, and plump the hazel shells  
 With a sweet kernel; to set budding more,  
 And still more, later flowers for the bees,  
 Until they think warm days will never cease, 10  
 For summer has o'er-brimm'd their clammy cells.

## 2

Who hath not seen thee oft amid thy store?  
 Sometimes whoever seeks abroad may find  
 Thee sitting careless on a granary floor,  
 Thy hair soft-lifted by the winnowing wind; 15  
 Or on a half-reap'd furrow sound asleep,  
 Drows'd with the fume of poppies, while thy hook  
 Spares the next swath and all its twined flowers:  
 And sometimes like a gleaner thou dost keep  
 Steady thy laden head across a brook; 20  
 Or by a cyder-press, with patient look,  
 Thou watchest the last oozing hours by hours.

## 3

Where are the songs of spring? Ay, where are they?  
 Think not of them, thou hast thy music too, —  
 While barred clouds bloom the soft-dying day, 25  
 And touch the stubble-plains with rosy hue;  
 Then in a wailful choir the small gnats mourn  
 Among the river salallows, borne aloft  
 Or sinking as the light wind lives or dies;  
 And full-grown lambs loud bleat from hilly bourn; 30  
 Hedge-crickets sing; and now with treble soft  
 The red-breast whistles from a garden-croft;  
 And gathering swallows twitter in the skies.

## 秋へ

## 1

霧と、熟れた果実の季節よ、  
 熟らすにたけた太陽の親しい友よ、  
 太陽と謀って、藁屋根の軒にはう蔓に  
 たわわに葡萄の果実を授けたり、  
 苔むす田舎家の庭木に、林檎の実を  
 芯まで熟らせて垂れさがらせたり、  
 瓢箪をまるまらせ、はしばみの殻を  
 甘い実ではちきらせたり、花々を  
 もっともっと咲かせたりして、蜜蜂までも、  
 夏のせいで巣が蜜であふれてははずと暖かな日が  
 続くと思ってしまう——そんな秋よ。

## 2

君が、実りに囲まれているところを見たことのない者などいな  
 いはずだ。  
 誰でも、外を探せば、君が、

穀倉の床に無造作にすわり、  
 穀殻を飛ばしている風に髪をあおらせている、そんな姿が目にはいるだろう。

または、途中まで刈りかけた畝うねの上で、芥子はしごの  
 実の香を嗅ぎながら、次に刈られる麦も、絡みついた野の花も  
 放ったままにして眠りこんでいる、そんな姿を。

また時には、拾った落穂を頭にのせて、  
 バランスをくずさぬよう小川を渡ってゆく女の姿を。  
 または、林檎酒をつくる搾り機のわきで、何時間も何時間も、  
 滴り終わるのを見ている——そんな姿の秋を。

3

春の歌はどこへ行った。そう、どこへ。  
 いや、そんなことを考えるのはよそう。君には君の歌があるで  
 はないか——

たなびく横雲が、しずかに死にゆく陽を赤くそめ、  
 切り株となった畑を薔薇色にする——  
 そうした時など、小さな羽虫の群れが、川岸の柳の下で、  
 そよ風の吹くにまかせて、吹き上げられては沈みつつ  
 憂いの歌をうたう——そんな歌が。  
 さらに、まるまると太った羊が山の方からメーとなく声や、  
 生け垣のコオロギの歌、庭の畑から  
 聞こえてくるコマドリの甲高い声、  
 渡りを前に集まってくるツバメのさえずり、までもが。

〔笠原順路〕

第16章 テニスン

(Alfred Tennyson 1809-92)

19世紀のちょうど分岐点・中央点ともいべき1850年は、テニスンの長い生涯のほぼ中央の時点でもあった。41年の歳月が過去に、そして42年の未来が前途に横たわっていた。この画期的な年は、名実ともにテニスンの生涯の分岐点ともなったのである。

5月に、英文学史上、燦然と輝く挽歌『イン・メモリアム』(In Memoriam, 1850)を刊行し、6月に、長年の婚約者エミリ・セルウッドと晴れて結婚し(貧困のため婚約期間は10数年に及び、結婚したとき詩人は41歳)、そして11月には、ロマン派詩人の巨星ワーズワスの跡を受けて名誉ある桂冠詩人に任命されるという、詩人にとって誠に記念すべき慶事が続いて起こった年であった。

そしてこの年を境にして、テニスンはヴィクトリアニズムのまさに代表者としての役職につかざるをえなくなったといってよい。異常なまでに鋭敏な詩人の感受性は、ヴィクトリアニズムの荒波に翻弄されることも度々起こり、詩人本来の独自性は消滅しないまでも、次第に影をひそめるに至るのは、ある意味では当然のなりゆきであったのかもしれない。

しかしヴィクトリアニズムなるものの影響を受けていない初期の作品に、詩人の本質的詩心が鮮やかに見られるのは当然であるが、ヴィクトリアニズムというヴェールを押しつけられても、テニスンの詩的天才が鈍ってしまったとは到底考えられない。こうしたヴェールを帯びながら、その背後に依然としてますます円熟するテニスンの詩才が存在することは、『イン・メモリアム』や

◎執筆者一覧——編者以外は執筆順に掲載

東中稜代（ひがしなか・いつよ） 編者 龍谷大学教授  
小泉博（こいずみ・ひろいち） 編者 常葉学園大学教授

安田章一郎（やすだ・しょういちろう） 名古屋大学名誉教授  
桂山康司（かつらやま・こうじ） 京都大学助教授  
岡田岑雄（おかだ・みねお） 松蔭女子大学教授・横浜国立大学名誉教授  
村井美代子（むらい・みよこ） 龍谷大学講師  
山中光義（やまなか・みつよし） 福岡女子大学教授  
斎藤 勇（さいとう・いさむ） 同志社大学名誉教授  
福田昇八（ふくだ・しょうはち） 九州ルーテル学院大学教授・熊本大学名誉教授  
佐野俊彦（さの・としひこ） 愛知大学助教授  
久野幸子（くの・さちこ） 愛知淑徳大学教授  
高谷 修（たかや・おさむ） 京都大学助教授  
福本幸之（ふくもと・たけゆき） 龍谷大学助教授  
柏木俊和（かしわぎ・としかず） 四条畷学園短期大学教授・神戸大学名誉教授  
吉田正憲（よしだ・まさのり） 熊本大学名誉教授  
杉野 徹（すぎの・とおる） 同志社女子大学教授  
原田 博（はらた・ひろし） 山梨大学教授  
笠原順路（かさほら・よりみち） 明星大学教授  
西前美巳（にしまえ・よしみ） 徳島文理大学教授・鳴門教育大学名誉教授  
桂 文子（かつら・ふみこ） 龍谷大学教授  
Reggie Watters（レジー・ウォターズ） 元龍谷大学教授  
内田能嗣（うちだ・よしつぐ） 帝塚山学院大学教授  
飯沼万里子（いぬま・まりこ） 光華女子大学教授  
山田泰広（やまだ・やすひろ） 南山短期大学教授  
宮内 弘（みやうち・ひろむ） 京都大学教授  
飯田 操（いひだ・みさお） 広島大学教授  
風呂本武敏（ふうもと・たけとし） 愛知学院大学教授  
川野美智子（かわの・みちこ） 佛教大学教授  
櫻井正一郎（さくらい・しょういちろう） 甲子園大学教授・京都大学名誉教授  
加茂映子（かも・えいこ） 元京都大学医療技術短期大学部教授  
薬師川虹一（やくしがわ・こういち） 東海学園大学教授・同志社大学名誉教授

イギリス詩を学ぶ人のために

2000年4月20日 第1刷発行

定価はカバーに  
表示しています

編者  
ひがし なか いつ よ  
東 中 稜 代  
こ い ず み ひろ いち  
小 泉 博 一  
発行者 高 島 国 男

世界思想社

京都市左京区岩倉南桑原町56 〒606-0031  
電話 075(721)6506(代)  
振替 01000-6-2908

© 2000 I. HIGASHINAKA, H. KOIZUMI Printed in Japan  
落丁・乱丁本はお取替いたします (共同印刷工業・藤沢製本)

ISBN4-7907-0799-7